

ひとくわ運動

遺骨の発掘、送還運動は二十五年九月から始まった。華僑留日同学会、全日自労、朝鮮人団体、共産党などを中心に進められ、作家の松田解子さんも加わった。十一月、浅草東本願寺で初の中国人殉難者慰霊祭が行われた。

この時、国民党政府の代表部は、劉智渠さんらの真相報告を中止させ、警察予備隊数百人を待機させるなど弾圧したという。

二十六年七月には、金一秀氏を遺族代理・施主として初めて現地住民による慰霊祭が行われた。戸別訪問で、花岡町全町内で約四万円のカンパが集まった。佐藤和喜治さんは「募金運動には町の人が心から協力してくれ、感謝しました。当時の話をいろいろ聞き、花岡事件の持っている意味が初めてわかったような気がしました」と語る。

翌年から、七月一日の慰霊祭とカンパは年中行事となった。花岡だけでなく、小坂鉦山、尾去沢鉦山で死んだ中国人の遺骨送還も取り上げられた。二十八年三月、当時の山本花矢町町長と話

し合って信正寺裏の納骨堂を開き、約四百の骨箱を取り出し、新しい箱に移して信正寺に安置。七月二日、小坂鉱山の六十余柱と合わせて貨物船黒潮丸で中国に送還した。第一次送還である。

地元では、圧力や批判も強かった。「会社(同和鉱業)が就職させないとか、警察が見張るとか、妨害はものすごかった」と鹿角市花輪、遠藤正広さん(五五)。しかし、一般の人の関心は徐々に高まっていった、という。

三十五年五月、鉢巻山で二遺体が見つかり、再調査の結果、縦十メートル、横三メートル、深さ三メートルの大穴が出てきた。これを発掘するため、全国にひとくわ発掘運動が呼びかけられ、三十八年六月五日からの発掘には秋教組、高教組、平和団体など多数が参加、十日間で十三体の遺骨が出土した。浅黄色の服を着た遺体は、マキのようにならべて積まれ、石灰をまいて段々に積んであったという。

この時の遺骨は、長野や岩手で発掘された遺骨と一緒に、三十九年十一月、第九次送還で中国に届けられた。

作文集

花岡事件を子どもたちに教えた先生がいる。元花岡小教諭の庄司時二先生(三五)。四十三年、受け持ちの六年生二人が夏休みの作文に花岡事件のことを書いた。社会科で取り上げることにし、子どもたちは親から話を聞き集め、先生は本で事件を調べた。秋教組の仲間も協力、花岡事件の全体像とその後の日中友好運動を明らかにする学習プランもできた。庄司先生は、子どもたちの話をもとに資料を作り、紙芝居にまとめた。子どもたちの感想――。

日本人がこれほどごんくだとは思わなかった。それにくらべて中国人はとてもしらばだと思ふ。敗戦後、花岡の人でにげた人もたくさんいた。にげた人は、自分のやったことがわるいと思つたからにげたのだと思う。

I 花岡事件・30年の壁

花岡事件がわからなかったときはアメリカ人をにくんでいた。ベトナムで戦争をし、ベトナム人を苦しめているからだ。それなのに日本人は人間にはできないようなごんくなことをしていく。私はアメリカ人などにくむしかくはないかもしれない。自分が日本人であることがみじめに

なってきた。早く戦争などがなく、平和な世界になりたい。だれだって戦争はしたくないのに。だれが戦争などをおこすのだろう。

大館工業高校の芳賀義克教諭(五〇)は、日本史の授業で五時間かけて花岡事件を教えて、今年で六年目になる。地元だけに生徒は熱心に耳を傾け、「何で中学で教えてくれなかったんだろう」と訴える声もある。一方で、教師の間には「いまさら寝た子を起こすな」「あの当時は日本人だつて食うものがなかった」と、事件を教えることに批判的な人もある。

文化祭のクラス展示に花岡事件を取り上げようとして、校長にやめさせられた高校も出るなどの圧力の中で、奥山昭五大館桂高教諭(四五)、樺田昌雄花岡小教諭(四九)らも地道に花岡事件が何であったのかを教え続けてきた。庄司先生らは、小・中・高での学習プランを全国教研集会で発表した。「中国では、戦争中の話を涙をこぼしながら子どもに語り伝えていきます。我々はどうでしょうか。獅子ヶ森のドキュメントだけでなく、本当の日中平和友好に結びつけなければ……」と樺田さんはいう。

不再戦

戦後、外務省は、強制連行した中国人を使っていた全国百三十五事業所からの報告に基づき、「華人労働者就労事情調査報告書」をまとめた。だが、この資料は公開されず、外務省はその存在すら否定しているという。これを発掘して、十年がかりで出版した赤津益造さん(七三)を東京神田の日中友好協会正統本部に訪ねた。赤津さんの話――。

各事業所が占領軍に出した膨大な資料は、用がすんだら焼却されるはずだった。それをある大学の先生がこっそり運び出してふとん袋に詰め、自分の家の押し入れに隠したんです。話を伝え聞いたぼくたちは茶箱やリソ箱に入れて、車で別の場所に運んだ。朝鮮戦争のころで、見つかったら大変でした。

赤津さんたちのスタッフ四人は、三十五年二月から三十六年三月にかけ「中国人俘虜殉難者名簿」「中国殉難者遺骨送還状況」「中国人強制連行殉難状況」「中国人被連行者名簿」を作り上げ、送還する遺骨とともに中国政府に届けた。これが事件のただ一つの「公式記録」といえる。実物

を見た。箱入りで半紙大、各冊が数百ページあり、連行された人、死んだ人の名前がびっしり並んでいた。

地元花岡では、ひとくわ運動に続き、三十九年から日中不再戦友好碑を作る住民運動が起こり、百数十人の構成で建立実行委員会が作られた。全国に寄付を呼びかけ、カンパ帳を手に花岡事件や碑建立の意義を訴えて回り、二年間で三千二百人から六十二万円が寄せられた。俳優滝沢修氏、小川真由美さんらも東京でカンパを呼びかけたという。

四十一年五月二十二日、中山寮があった近くの小高い丘に、高さ五メートル、白みかげの「日中不再戦友好碑」が建った。郭沫若氏の言葉と、不再戦友好の誓いが刻まれた。除幕式では作家の松田解子さんが詩をささげた。

「日中不再戦はおかしい。日本の一方的な侵略だったではないか」と指摘する人がいる。実行委員の一人だった奥山昭五大館桂高教諭もそれを認めるが、当時は運動を広げ、まとめるためにそう名付けざるを得なかったのだ、といった。

四分の一

不再戦の碑を建てたあと、中国人遺骨発掘・送還運動を進めてきた地元の人たちは、四十六年十月、「日中不再戦友好碑を守る会（武田武雄会長）を作った。政党や政治信条を越え、花岡事件を後世に伝えて、日中友好に尽くそうという人たちが集まった。今年も六月三十日、会員約三十人で慰霊祭を行い、不再戦の碑周辺を清掃、信正寺で犠牲者の冥福を祈った。

守る会が発足するまでに一つの経緯がある。四十一年秋、不再戦の碑が建って間もなく、それまで運動を進めてきた日中友好協会が中央段階で共産党系の日中友好協会と社会党系の日中友好協会正統本部に分裂した。中国は物産展や歌舞団、スポーツ使節をすべて正統本部のルートを通した。これを受け入れるため大館にも正統本部の支部ができた。

花岡事件の地元で、気まづい対立が芽生えた。「今まではなにもしなかった連中が、運動を横取りした」と共産党系が批判し、社会党系も中国からの訪問客の応対をしながら、負い目のようなものを感じていたようだ。原水爆禁止運動や、日中友好運動などの平和運動自体が分裂すると

いう矛盾がここでも起きた。「守る会」はそれを乗り越えて結成された。社会党も共産党もない。正統本部中央本部が「毎年地元で開いているはず」という慰霊祭は、実はこの「守る会」の手で続けられてきたものだ。一方、実際に活動の中心となってきた共産党系の人たちも、分裂で中国とのルートをなくしたことを不本意ながらも、熱心に活動を続けてきた。

今年六月、大館工業高校の芳賀義克教諭は、二年生百八十五人に花岡事件について教えたあと「事件を知っていたかどうか」アンケート調査した。その結果――。

- 今まで知らなかった……………47人
- 名前だけは知っていた……………52人
- 少しは知っていた……………63人
- 大体のことは知っていた……………23人

生徒の四分の一がたった三十年前の、地元で起こった事件を知らなかった。事件を語り伝えようという地道な努力は、三十年の時間の壁の前では無力なのだろうか。それとも、人々が語りたがらない事件を四分の三も知っていた、と評価すべきなのだろうか。

小兵大人

中山寮でも、中国人に温かく接した人がいた。今は鷹巣町の病院に勤める越後谷義勇さん（五十一）。十九年十月から二十一年四月まで中山寮事務員だった。劉さんや李さんと現在も交際を続けており、今年も札幌まつりに招かれたという。

補導員は中国人をバカにしているのが多かったですね。耿大隊長など毎日のように「理由なしに多くの面前でなぐられるのは死ぬよりつらい。納得できる理由を説明してほしい」と頼んでました。でも、気にくわなければ棒でたたいたようです。焼け火ばしでリンチした時は、寮内でも大騒ぎになり、河野所長も来て注意しました。でもその後も隠れたところでは、制裁があったみたいです。

食糧は大変でした。月に三回、牛、馬を密殺してみんなで食べたし、鹿島組でもヤミ米を買ったりしてね。巡査が来ると、米一升渡して見逃してもらいました。横流しのうわさもありました。河野所長が補導員に、こういううわさがあるけどと注意しているのを聞きました。朝鮮人がいた

東亜寮とか、ほかの寮に売ったんじゃないですか。

暴動前は二、三日に一人の割で死んだ。栄養失調と皮膚病ですね。私も毎日、一、三十人ずつ鉱山病院に連れて行きましたよ。どんどん死んで、毎日役場に死亡届を出しました。所長も「こう死なれては工事ができない」とこぼして……。

二十年五月ごろ、大隊長が私に「もう日本は負ける」っていうんです。バカヤロウ、そんなこと他の日本人にいうと殺されるぞといったけど、あれは不思議でしたね。

越後谷さんは「終戦の翌日、MPがジープで来た」と記憶している。横浜裁判では県警と鹿島組の両方から、私の方をよくいってくれと頼まれて困ったともいう。当時二十歳の越後谷さんは、時折ポケットにしたのばせた食べものを、劉さんなど中国人に分けた。小兵大人と呼ばれた。鬼のような日本人が多かった中で、本当に「小さな偉人」だったに違いない。

当時の越後谷さんの月給は百二十円。米一俵二十五円、小学校教師の初任給四十五円に比べると、飛びきりの高給だった。中山寮をやめた時、千円の貯金ができていたという。